

サンプル ダイジエスト版

レイラインハンティング

聖地を結ぶ不思議な道を通る

日本編 1

目次

プロローグ

第一章 東北 ― 巨石文化とアラハバキ信仰 ―

- ・ 北東北に栄えた古代文明・三内丸山
- ・ 大湯ストーンサークルとピラミッドが指し示すモノ
- ・ 坂上田村麻呂の呪い

第二章 関東 ― 東国三社と蝦夷 ―

- ・ 記紀神話と東国三社
- ・ 巨石信仰と東国三社

第三章 関東二 ― 水戸光圀と巨石信仰 ―

- ・ 水戸黄門とレイライン
- ・ 熊野さまの導き……

第四章 東京 ― 江戸五色不動を巡る ―

- ・ 江戸城を守る五芒星の結界
- ・ 怪僧「天海僧正」
- ・ 炎揺らめく不動明王

第五章 信州 ― 白馬風切地蔵と戸隠信仰 ―

- ・ 白馬を天災や疫病から守る風切地蔵
- ・ 土地に呼ばれるということ
- ・ 冬至の日の出を迎え入れる

第六章

京都

―封じ込められた怨霊―

- ・ 上賀茂神社の歪んだ空間
- ・ 怨霊から逃れて辿りついた平安京
- ・ 洛北に隠されたもの
- ・ 秘められた近畿の五芒星

第七章

近畿

―隠された五芒星を巡る―

- ・ 2000年前に描かれた五芒星
- ・ 伊吹山
- ・ 元伊勢
- ・ 淡路島・伊弉諾神社
- ・ 熊野
- ・ 伊勢

第八章

能登

―イルカ伝説と泰澄―

- ・ イルカと交感するシャーマン
- ・ 能登に存在した「イルカ呼び」
- ・ 泰澄の「魔物封じ」
- ・ 気多大社の「特殊神事」
- ・ 中谷家と手しごと屋

第九章

若狭

―不老不死伝説と空海―

- ・ 八百比丘尼
- ・ 不老不死を求めた者たち
- ・ 神々の宿る場所

第十章 沖縄 ―女神を祭る聖地―

- ・ 男子禁制の聖地
- ・ 今帰仁・クボー御嶽
- ・ 返戸岬・安須森御嶽
- ・ 首里・首里森（しゅりむい）御嶽
- ・ 女神からの贈り物

あとがき

データ集（別添）

- ・ leylinepoint.gdb(GARMIN_format)
- ・ leylinepoint.gpx(GPX_format)
- ・ 江戸風水.rcm(SMDver10_format)

一年のある日、ある瞬間

太陽の光によって結ばれる複数の聖地がある

一見ランダムに点在する聖地を結ぶと

大地にある形が浮かび上がる

いったい、いつ、誰が、何の目的で

そのように聖地を配置したのだろうか？

聖地を結ぶ目に見えないもう一つの道 \parallel レイラインを辿ると

そこには何が現われてくるのだろうか……

デジタルマップとGPSを駆使し

日本という大地に秘められた「不思議」を探し求める

【プロローグ】

● 地霊の気配 ●

旅をしていると、初めて訪れた土地なのにとても懐かしい感じがしたり、その逆に「ここは自分の居場所ではない」といった冷たい疎外感を感じることもある。

あるいは、もっとはっきりと、そこにいるだけで体の中に力がみなぎってくる場所があったり、逆にそれまで元気だったのに、その場所に立った途端に体の中の力が吸い取られてしまうことがある。

高校時代からぼくは登山にのめり込んだ。大学時代は、年間100日近くも山に入り、八ヶ岳や奥秩父、北アルプスの稜線を辿っていた。

山では、個々の土地が持つ独特な雰囲気をもっとも露骨に感じさせられた。

長い縦走の途中、そこに辿り着くまでは重い荷物に喘いでいたのに、その場所に差し掛かった途端、急に力が漲り、地の果てまでも行けそうな気がしてくる。逆にある場所では、それまで快調に歩いていたのに、そこに達した途端に腰が抜けたようになり、立ち上がって先へ進もうという気力が失せてしまう。

そういった「正」や「負」の感覚は、それぞれの場所に固有で、そこを何度訪れても印象はほとんど変わらない。しかも、そんな感覚はぼく一人のものではなく、パーティーを組んでいれば、メンバー全員が多かれ少なかれ同じような感覚に囚われる。

紀元前1世紀、古代ローマ帝国が全盛を極め、ヨーロッパ全域から北アフリカにまでその範囲を広げていたとき、辺境に派遣された兵士たちは、進駐した土地に固有の雰囲気気が漂っているのを感じとった。そして、それをゲニウスロキイ地霊と名づけた。

目に見える景観の裏側に潜む「何者か」の気配、それは先進の文明社会から訪れたローマ帝国の兵士たちを得体の知れない不安な気持ちに陥れ、ときに畏怖させた。

ローマの兵士たちがゲニウスロキを強く感じ取った場所は、北ヨーロッパではケルトの聖地に奇妙に符合し、北アフリカでも土着信仰の聖地に符合していた。つまり、太古から、人々は土地に秘められた地霊を感じ取り、他の土地とは区別していたことを物語っている。

ぼくが登山を通して体感したのも地霊であるといっていだらう。

いったい地霊とは何なのか、その正体を知りたい。取り憑かれたように山に向かい、新たな地霊と次々に出会う度に、そんな思いが強まっていった。

山に登っていると、意外な場所に小さな祠や人がかつて長期間そこで野宿していたような形跡に出会うことがある。さらに、主要な山岳にはほとんどといっていいほど、頂上に古い祠が祀られている。

人々を拒むように聳える山岳は、世界のどこでも神々が住む場所とされた。近代登山の洗礼を受けるまで、ヨーロッパもヒマラヤもまさに人智を越えた世界であつて神の領域だった。日本でも、山岳は神の領域だったが、人が辿り着くのを完全に拒むほどは高くもなく急峻でもなかった。そこで、神々の領域である山岳に踏み込み、そこで修行する「修験道」が発達した。

人の住む里から離れ、異界である山岳に臨む。そして、山岳に宿る神と接して、人としての意識を越える。それが修験道の目的だった。

レジャー化した登山の中にも、「山開き」や「御来光」といった形で修験道の影響は色濃く残っている。そんな、山という「場所」を信仰の対象とし、さらに修行の場とした修験道ならば、ぼくが感じた地霊の謎に迫れるかもしれない。そんな思いから、山岳修験の世界にも足を踏み込むことになった。

修験道は、7世紀に役小角（役行者）によって創始もしくは大成されたといわれている。空海も奈良の大学を飛び出してから遣唐使として再び歴史の表舞台に復帰するまでの7年間を山岳修行に明け暮れて過ごしたとされる。

修験道では、経験的に人を心地よくさせる場所と、逆に人を不安にさせる場所を特定している。そして、その場所の特性に応じた具体的な修行を行う。

人を不安に陥れる谷間や滝行場では、その場所がもつとも恐ろしく感じられる黄昏時に一人置かれ、押し寄せる不安や恐怖を克服するように強いられる。そして、晴れやかな気分になれる峰の頂では、それまでさんざん精神と肉体を疲弊させられた後で、劇的な御来光を拝まされ、大自然の恩寵に魂が打ち震えるような歓喜を呼び覚まされる。

紀伊半島の内陸部を縦断する大峰の「奥駆け」や出羽三山、御嶽等では、修行のプログラムを効率的に組み込んだコースが整備され、先達と呼ばれる熟練のガイドが個々の修行者の個性やコンディションを見極めながら、体験の度合いをコントロールしていく。

修験というシステムを体験することによって、人は確実にアルタードステーツ（超常意識）を体験する。そして、目に見える自然の裏側にあるスーパーネイチャー（超自然）の存在を意識し、より敏感に地霊の気配を察知できるようになる。

だが、修験道では、地霊が存在することと、それが正と負の性格を持つものに分かれ、人に確かに作用すること、そして地霊と接することによって、人がスーパーネイチャーを体感できるということは理解できても、「地霊」がそもそも何なのかは教えてくれない。

修験道に足を踏み入れて、その洗練されたシステムに感銘を受けはしたものの、ぼくは、まだどこか消化不良な気持ちを抱えたまま、「地霊」というものを考えていた。

そんなとき、ふと思いついたのが、「レイライン」という概念だった。



古来、日本では山岳は神々の宿る場所とされた。修験道では、あえて人を寄せつけない「山」を修行の場所として、個々の土地に固有の雰囲気を利用して、修行のメニューを調べていった

第二章

【関東一 東国三社と蝦夷】

古代

「東国」と呼ばれた辺境に創建された三つの神社

国譲り神話にまつわるこの三社は一体となり

大地にレイラインを描く

さらに

記紀神話に描かれた逸話をそのまま体現する

位置関係が秘められている

いったい誰が

何のために

そんな「仕掛け」を施したのか……

東国三社の北の要ともいえる位置にあるのが鹿島神宮だが、この神社は他の神社では見られない奇妙な構造を持っている。

表参道から鹿島神宮に向かっていると、真っ白に輝く大鳥居に正対する。この鳥居は西を向いている。一般に、神社の鳥居は南を向き、参道も南へと伸びている。稀に鳥居が東を向き、参道が東に向かって伸びているケースもあるが、西向きの鳥居というのは滅多にない。じつは、この鳥居の向きは先に上げた国譲り神話と密接に結びついている。西を向いた鳥居の遙か先、228 kmを隔てた先には、諏訪大社のご神体山とされる守屋山がある。

諏訪大社は諏訪湖を挟んで西に上社本宮、上社前宮、東に下社春宮、下社秋宮という四社からなる。この諏訪大社の構造もとてもユニークで、詳細に見ていくとここだけで一項が必要となるが、それは別の機会としてここでは論考しない。諏訪大社の源は上社前宮の背後に聳える守屋山で、ここに故郷の出雲を追われた建御名方神が最初に降臨したと伝えられる。

鹿島神宮の本殿の位置は「東経140度37分54秒、北緯35度58分07秒」、守屋山山頂は「東経138度05分36秒、北緯35度58分04秒」。鹿島神宮の本殿から鳥居の方向へと目を向け、そのまま進んでいった先、緯度にしてわずか3秒、距離にして約90メートルのずれで守屋山山頂をにらみ据えていることになる。さらに、この北緯35度58分の線上には鹿島神宮の分社が点々と配置され、国譲りを迫った鹿島神宮の祭神武甕槌神に対して唯一敵対した建御名方神を記紀神話の時代から遠く隔たった今でも威嚇している形になっている。

「鹿島立ち」という言葉がある。

朝鮮半島や大陸から日本列島を脅かす軍勢が攻めてくるのを九州沿岸で阻止するため、決死の覚悟で派遣された防人たちが、鹿島神宮や鹿島神宮の分社である奈良の春日神宮に参り、武運長久を祈って旅立つことを表した。これは国譲り神話における武甕槌神の無敵の強さに肖るという意味であった。同様に、鹿島神宮は武人たちに崇敬され、奈



守屋山を御神体山とする諏訪大社前宮
諏訪大社には「御柱」と呼ばれる供犠儀礼
を思わせる不思議な祭りが伝わる。
また、「万治の石仏」と言われる不思議な
巨石遺構もセットのように存在している



西を向いた鹿島神宮の大鳥居とその奥にある神門
この参道を遙か彼方まで伸ばしていくと諏訪大社に行き当たる

良、平安時代から戦国時代にかけて、多くの武人が戦勝祈願を行った。さらに、鹿島神宮には武甕槌神を祭る社として以上に、朝廷の東国支配のための拠点という意味合いがあった。

鹿島神宮の構造を詳細に見てみよう。

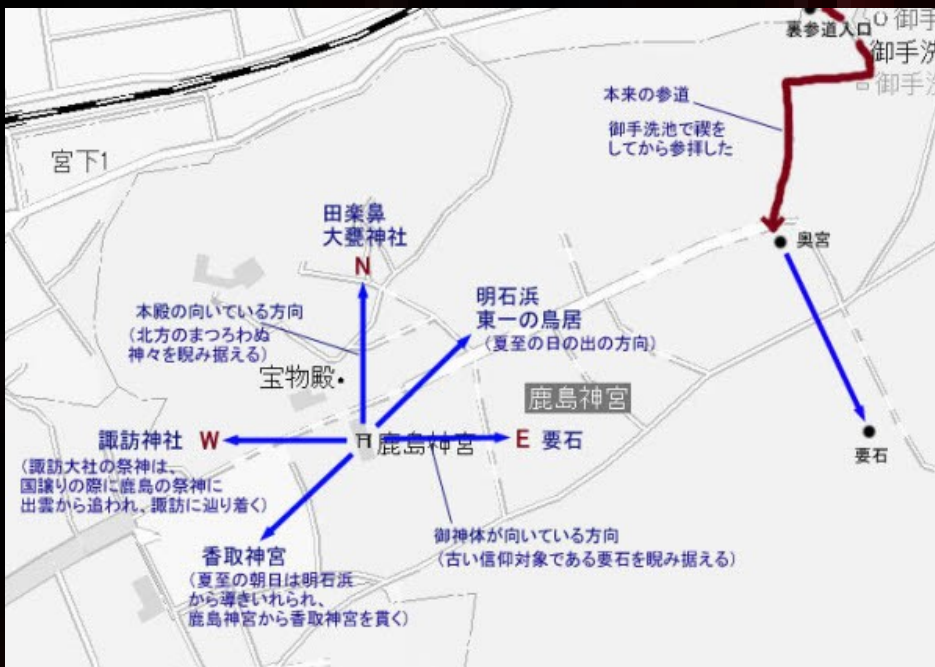
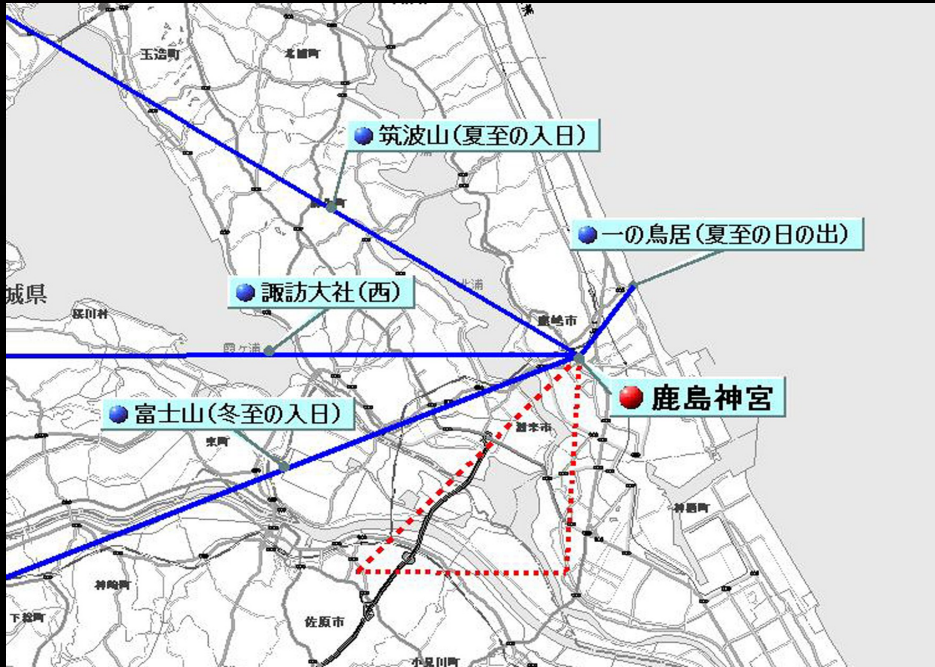
西を向いた鳥居の下を潜る参道は、真西ではなく、本殿方向から鳥居を見てやや南を向いている。その参道を辿って朱色が鮮やかな神門を潜ると、参道はそのまま先まで伸びているが、本殿は参道の右手に接する形で鎮座する。その本殿は北を向いている。北向きの本殿というのもほかにほとんど例がない。さらに、本殿の中に安置されるご神体は東を向く。参拝者が本殿に向かって拝んでも、ご神体はそっぽを向いているというわけだ。

北東から南東方向へと伸びる参道は鹿島神宮の本殿から見て、冬至の日の入りの方向を指している。そして、今では建物に邪魔されて視認することができないが、かつては富士山頂にその夕陽が沈む光景が見られた。冬至の入り日を拝むのは太陽再生の祈念を意味するが、そこに富士山を配置したのは、その優美な形とスケールから日本随一の地霊の力が沸き立つ場所としての富士山の力を借りて、より強い太陽の再生を願うという意味が込められていたのだろう。

この鹿島と富士山を結ぶライン上には、皇居（江戸城天守閣）、明治神宮が位置する。さらに東京都内の下北沢から狛江にかけて小田急線の線路が直線で10kmあまり続くのだが、この直線路と鹿島―富士ラインはぴったり重なり合っている。また、下北沢駅をオーバーパスする陸橋の上に立って、鹿島神宮方面を臨むと、そこには摩天楼のようにNTTドコモの本社ビルが屹立している。

2000年以上前に創建された鹿島神宮の配置の意味は、江戸城創建の際にも、昭和に入ってから鉄道の建設の際にも、さらには平成の現代にまで、脈々と伝えられてきたことを物語っている。

鹿島神宮から見て夏至の日の出の方向には太平洋に面した明石浜の一の鳥居があり、夏至の入日は関東平野でひときわ目立つ霊峰筑波山に沈む形にもなっている。冬至や夏至を意識したこれらの配置は、鹿島神宮が……というよりも、正確には、ここに社が置かれる以前のもっとプリミティブな聖地の時代から……ここが太陽信仰の中心であったことをうかがわせる。



北面する鹿島神宮本殿。
左の図を見ると、鹿島神宮そのものの
配置と神宮の境内に秘められた構造が
はっきりする。



第四章

【東京 江戸五色不動を巡る】

江戸時代初期

徳川家康から孫の家光まで三代の将軍に仕えた

天海僧正という怪僧がいた

その天海が仕掛けた

「江戸の風水」

マジカルな結界に守られた江戸と

その名残が現代にも生き残る東京の街を探訪する

●江戸城を守る五芒星の結界●

西に位置する部屋に黄色いものとお金に関するものを一緒に置いておくと財運が上がる……、玄関を入れて目の前に階段の登り口のある家は財が傾く……、ご不浄であるトイレや水周りは北もしくは東北に配置する……等々、よく耳にする「風水」的な話だが、これらは「開運」法ではあっても厳密には風水とは言えない。

本来の風水は、個人的な家やら墓というよりもっと大きく都市計画レベルで用いられるものだった。

自然の地形から大地の下を流れる「気」を読み取り、都市を繁栄させる気が集まる場所を探す。そして、必要に応じて池や塔、寺院などを配して、気の流れをコントロールして、より良い地勢に改変して王宮の繁栄と存続を図る。それが古代中国で生まれた風水の考え方で、中国の古い都市ではもちろん、日本でも、桓武天皇が創建した平安京⇨京都、天海僧正が青写真を描いた江戸⇨東京を代表として、中世から近代にかけての都市計画で風水の原理が用いられている。

今回は、日本の都市計画に風水が利用されたもつとも身近な例として江戸⇨東京を取り上げ、それをモデルに、風水の底流にレイラインの考え方があることを検証していると思う。

江戸の風水といえば、上野の寛永寺や日光東照宮、将門の首塚などがよく挙げられる。寛永寺は江戸城から見て鬼門の方向に配置され、魔を封じる役目を負うが、比叡山延暦寺に対して東叡山寛永寺として比叡山を模している。日光東照宮は、江戸幕府開府の祖徳川家康を東照大権現として神祭りし、江戸を守護すると同時に日光に発する気を江戸へ送り込むための起点として設置された。そして、朝廷に対抗して「新王」を名乗った関東武者の象徴、平将門を守護神として江戸城の近傍にその霊を祭った。これらは、江戸城を守護し、江戸という街を風水的に発展させるための根幹を成すものだが、もう一つ、重要な風水的仕掛けが施されている。それは「江戸五色不動」と呼ばれるものだ。

目白不動、目黒不動は、それぞれ「目白」、「目黒」という山手線の駅があるから馴染みが深いが、この二つ以外に「目黄」、「目赤」、「目青」という三つの不動明王を

祭った寺がある。この五つの不動を総称して「江戸五色不動」という。

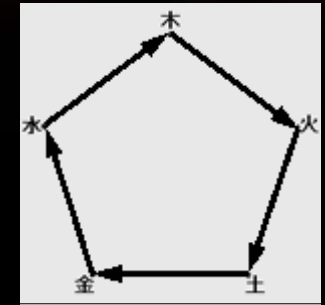
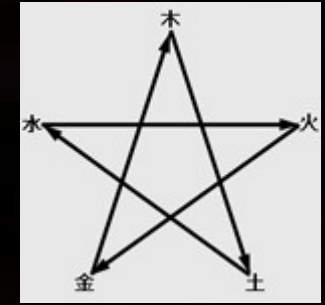
五色は陰陽五行説に由来するもので、木・火・土・金・水の五つの元素が万物を構成し、それぞれに青・赤・黄・白・黒の五色が相当するとされる。五つの元素を五角形になるように並べと、隣り合う元素は順送りに相手を生み出していく関係にある。これを「相生」という。個々の関係は、以下のようになる。『木生火』：木は燃えて火を生む。『火生土』：物が燃えればあとには灰が残り灰は土に還る。『土生金』：…：鉱物・金属の多くは土の中に入り土を掘ることによってその金属を得ることが出来る。『金生水』：…：金属の表面には凝結により水が生じる。『水生木』：…：木は水によって養われ水がなければ木は枯れてしまう。

さらに、「相生」の関係を結ぶ五角形には内接する五芒星が描き出される。この五芒星を描く線で結ばれた元素は、互いに相手を討ち滅ぼす「相剋」の関係にある。『木剋土』：…：木は根を地中に張って土を締め付け、養分を吸い取って土地を痩せさせる。『土剋水』：…：土は水を濁す。また土は水を吸い取り、常にあふれようとする水を堤防や土塁等でせき止める。『水剋火』：…：水は火を消し止める。『火剋金』：…：火は金属を溶かす。『金剋木』：…：金属製の斧や鋸は木を傷つけ、切り倒す。

陰陽五行説では、万物の生滅の根源にあるこの五元素を配置した五角形と五芒星が魔除けとして、もっとも強力なものとされている。

五角形に内接する五芒星は、その内側に五角形を描き出す。さらにその五角形には内接する五芒星が含まれている：…：五角形と五芒星は合わせ鏡のように無限に連鎖していく。さらに五角形も五芒星も一筆書きで描き出される図形であり、魔が五角形の内に入り込もうとしても、無限連鎖する一筆書きに閉じこめられてしまうことになる。平安時代に活躍した陰陽師、安倍晴明はもっとも強力な護符として桔梗紋を用いたが、これがまさに五芒星で、陰陽五行説を援用したものだ。

江戸五色不動は、江戸城を五色不動が描き出す五角形に五芒星の中心に置き、江戸の外から「魔」が侵入するのを防いでいるわけだ。



五芒星は、それ自体が正五角形に内接し、その内側に正五角形を描き出す。五芒星と正五角形は合わせ鏡のように無限に連鎖していくので、そこに「魔」が入りこむと抜け出せない。

さらに東洋では五行説と結びついて、正五角形と五芒星のそれぞれの頂点が火、水、木、金、土に当てはめられ、正五角形ではそれぞれが生かしあう「相生」、五芒星ではそれぞれが牽制しあう「相克」の関係にあって、これまた無限連鎖の一筆書きの中に「魔」が閉じ込められるとされる。

現在に伝えられる五色不動。目黒不動を除いて、戦災や寺の都合などによって後世に場所が変わったものがほとんどで、今では天海の青写真を正確には伝えていない。だが、江戸城を取り囲むように配置されていたことは確かだ。他の鬼門封じのラインや江戸の守護神とされた平将門の首塚なども関連づけて配置されていることがわかる。

第六章

【京都

封じ込められた怨霊】

京都＝平安京は、「四神相応」の風水都市と言われる

この都市の創建を命じた桓武天皇は

風水や陰陽道に精通していた

国の平安を祈念するという意味で命名されたこの都市は

じつは国の平安ではなく、桓武の平安を守るためのものであった

四神相応だけではない

複雑なこの都市の『仕掛け』を見ると

一人の怨霊の姿が見えてくる

●上賀茂神社の歪んだ空間●

京都市街の北端、かつて化外の地とされた洛北の森が間近に迫る一角に上賀茂神社（賀茂別雷神社）がある。1200年前、恒武天皇が平安京の創建を決めた際、山城国の産土神である賀茂別雷神を現在の場所に勧請したもので、ここから南東3kmの場所に位置する下鴨神社と一対を成し、王城の鬼門を封じて守護している。

上賀茂神社をお参りした人は、誰でも奇妙な感覚に囚われる。その原因はバランスを欠いた空間構造にある。個々の社殿や儀礼の様式、神社としてのたたずまいに格別不思議なところはない。ところが、一の鳥居を潜り、参道を辿っていくにつれ、この場所の尋常ではない構造に違和感が募っていく。

南から北へ真っ直ぐに伸びる最初の参道は、神社としては当たり前の形だが、一の鳥居を潜るとそれは不自然に北東へ折れ曲がる。さらに神域を区切る瑞垣が視界を斜めに横切り、それを越えて中に入ると、瑞垣の斜線とも微妙にずれる軸線に沿った細殿が立ち塞がる。参拝者は本殿へ向かうためにこれを迂回させられる形になるが、迂回しても拝殿や本殿に直進することはできず、ジグザグに歩まされ、橋を二つ渡ってようやく本殿へ辿り着くことになる。

そして、肝心の本殿までもが不思議な方角を向いている。ノーマルな神社の本殿は南（方位角180度）を向く。まれに東（方位角90度）を向く場合もあるが、上賀茂神社本殿はそのどちらでもなく南南東（方位角163度）を向いているのだ。しかも、本来ならご神体として本殿の中もしくは後にあるはずの盤座が、南南東を向いた本殿の正面に剥き出しで位置している。

この奇妙にねじ曲がった上賀茂神社の構造。じつはここに平安京Ⅱ京都創建に関わる深い謎が隠されている。

二の鳥居の方向を向く
細殿。伊勢 - 元伊勢
ラインと直角に交わる
方向になる



細殿前の立砂の並びは
近畿の五芒星の一辺
伊勢 - 元伊勢ラインと
一致している



唯一まともな方向を
向く参道だが、二の
鳥居はそっぽを向い
ている



本殿前には磐座がある。
その先には京都御所、
さらに上御霊神社が位
置している

第十章

【沖繩 女神を祭る聖地】

ゆったりとした時間の流れに身を浸して

漂うように旅する

なぜか頻発するデジャヴュのような

「夢」

女神の島こそが

ほんものの竜宮城なのかもしれない

「女人禁制」、「女人結界」という言葉がある。宗教的な聖地で、生理の血にまつわる穢れを避けるという意味で、女性が立ち入ることを忌み嫌う場所のことだ。高野山はもとも女人禁制で、それでも弘法大師の御利益にあやかりたいと願った女性たちが奈良の室生寺を道場としたことで、室生寺が「女人高野」と呼ばれたことは有名だ。他にも修験道場として名高い出羽三山や大峰などの古い山岳修行場などには、まだまだ女性が立ち入ることを拒む場所がいくつもある。

そうした「男性原理」が幅をきかせる本土に対して、沖縄から南西諸島にかけての無数の島嶼からなる琉球弧では、逆に「男子禁制」として男が立ち入るのを拒む聖地がある。また、男が参加したり見ることでできない祭りが今でも受け継がれている。

琉球は彼岸の地であるニライカナイからアマミキヨという女神が降り立ち、国を拓いたとされる。女神が拓いたということで、その女神に仕える神官は聞得大君（きこえお おきみ）と呼ばれる王族に連なる女性で、さらには公的な巫女のノロや土俗の巫女であるユタが民間の宗教儀式を執り行う主役となっている。琉球弧の宗教、精神世界は、本土の男性原理の世界と対照的に女性原理が支配している。

本土では、垂仁天皇の時代に、宮中で祭られていた天照大神を宮廷外に祭り直し、代々、天皇の娘が斎宮として天照大神に仕えることとなったが、これはあるいは琉球の女神信仰がなんらかの形で反映されたものかもしれない。

沖縄には御嶽（うたき）と呼ばれる聖地が本島をはじめ各島嶼に点在している。それは、本土の感覚でいえば神社のご神体や依代（よりしろ）神が宿る場所や物の意味）と似たようなもので、自然の岩や山が御嶽とされ、今でも熱心な信仰を集めている。

数多い御嶽の中で、「七御嶽」と呼ばれる場所が沖縄本島と本島の南西に浮かぶ久高島にある。沖縄創生の女神アマミキヨはまず久高島のクボー御嶽に降り立ち、さらに世界遺産で知られる本島の齋場御嶽（セイファウタキ）に渡り、残る五つの御嶽を伝って琉球を拓いていったとされる。

ある冬の日、その七つの御嶽を訪ねてみようと思いたった。

デジタルマップに全国の「聖地」をプロットし、様々に結んで関連性を調べてみると、同じ祭神の神社や古代の巨石遺構などは、夏至、春分秋分、冬至といった特定の日の太陽の光で結ばれるケースが多いのだが、沖縄だけは、そういった太陽信仰をベースとしたレイラインがどうしても現れてこなかった。それで、実地に御嶽を初めとする沖縄の聖地や遺跡を訪ねてみたいと考えていたのだ。



琉球創生にまつわる七つの御嶽
本島に6カ所、そして久高島に
1カ所ある

本編 .. 217 ページ

付録 ..
・レイラインデータ 300 件を収録した GARMIN 形式ファイル

・同 GDX 形式ファイル

・『江戸風水サンプル』昭文社スーパーマップルデジタル形式

・ガイドンスパンフレット

値段 .. 2,200 円

発売 .. OBT セレクト <http://www.ley-line.net/shop/leyline.html>

レイラインハンティング

——聖地を結ぶ不思議な道を辿る——

日本編1 ダイジェスト版

2009年8月20日 初版発行

著者 内田一成

発行者 内田一成

発行所 デジタルコンテンツラボ（DCL）

〒331-0081

埼玉県さいたま市北区吉野町1-363-5

A-102

<http://www.ley-line.net>

uchida@dclweb.com

*本文中の地図図版は、『スーパーマップルデジタル』（昭文社）による独自の作図を昭文社の許諾の元に掲載しています。

*本メディア掲載の記事・写真・図版などの著作権はすべて著者に帰属します。無断転載・複製を禁じます。